

民衆史の遺産－巫女：「みこ」といわれ、「ああ お宮さんにいる女性 白い着物に赤い袴 若い娘たち」と思っていた。巫女から、巫娼、卑弥呼、シャーマン、イタコ・ノロと話が続く。何人かの先生が書いておられることを抜き書きしてみた。千年以上の時間、北から南まで、ウソもあればホントもあるという面白さ。その面白さがまだまだつかめていない、難しい内容、またもう一度この本「巫女」は読んでみたい。

谷川健一著<巫女と巫娼>

◎遊部（あそぶべ）：葬儀の時、または殯において歌舞をもって奉仕すること。

◎殯（もがり）：日本の古代に行われていた葬儀儀礼で、死者を本葬するまでの長い期間、棺に仮安置し、わかれを惜しみ、霊魂を恐れ、復活を願いつつ、腐敗、白骨化を確認し、死を確認する。

◎「魏書」の「東夷伝」（魏書は魏志倭人伝の本体。魏書の中の倭人の部に卑弥呼のことが載っている）：「鬼道を事とし よく衆を惑わす」シャーマニズムを利用して祭りごとを行ったひとりの中心人物。弥生・縄文の時代にも呪術があったのでは。多収穫、子孫繁栄、健康、戦い・・・卑弥呼は鬼道を事とする弥生末期農耕社会の巫女王なのでは。

◎井原西鶴の好色一代男の主人公の世之介は、酒田の港で田舎わたらいのアガタミコに会う。アガタミコが売色の女に変身する。

「あらおもしろの竈神（かまど）や、おかまの前に松うえて、すずしめの鈴をならして、アガタミコ（県御子）来たれり。下には檜皮色の襟を重ね、薄衣に月日の影をうつし、千早（？意味不明）・懸帯（かけおび）むすびさげ、うす化粧して黛こく、髪はおのづから、なで下げて、その有様尋常なるは中々お初尾のぶんにてはなるまじ不思議（様子がりっぱ なかなか賽銭ぐらいではとてもできない）、と人（事情通の人）に尋ねければ、よき所へこころのかよふ事ぞ。あれも品こそ替われ、のぞめば遊女のごとくなれるものなり」（さすがいい事に気づかれた、あの巫女も上品だが、こちらが望めば・・・それを聞くや）それを呼び返して男住居の宿に入れて、その神姿、とりおかして（脱がせ）あらた女体あらはれたり。

◎谷川先生：1969年は八重山でユタの話を書くことがあった。Q「神とはいったい何者ですか」A「神様は人間になったもの」Q「神はどのような格好でした」A「神様はボロボロの衣装で 乞食同然の姿でした」乞食の姿に身をやつした神は、多くの神話・民話にでてくる共通のパターン。Q「あなたはあの世に行ったことがありますか」A「あの世に行ったことがある この世にある一切のものが 学校も警察もある 大勢の白い服を着た人々に見送られ、空を飛んで帰った 帰るときにあの世の神様が 振り返ってはならぬと言ったが 途中戒めを忘れ振り返って見ると大勢の見送り人はすべて骸骨だった」シャーマンは瀕死の病人の魂を冥府から連れ戻す儀礼、シャーマンはトランス（忘我恍惚）を得意としそのトランスの間に、魂は肉体を離れ天上界に昇り、下界に降りてくる能力を持つと信じられている。

◎次も谷川先生の調書なのか小説なのかさだかではないが、「根間カナ」という女性がカンカリヤ（神がかった人）になっていく様が綴られている。カナが二十歳で長女を出産したのが、1969年なので、主人公のカナはオレより三つ下だ、実在の人物のようなので、まだ生きておられるかな。引っ張りだこのカンカリヤとはいえ、収入は少ない。

カナが子供のころ、カナも父親もカンカリヤの家が好きだった。カンカリヤの家に入りし祭壇のそばでカンカリヤの話や神ねがいの儀式を眺めると心が安らいだ。しかしカナはカンカリヤになることを厳しく拒んだ。人並みの幸せな家庭を作りたいという少女らしい夢があったからだ。カンカリヤになるのを拒ばみ、先延ばしにすることを、「延期願ひ」といった。カナは高校を卒業するとすぐに恋人と結婚した。カナが結婚したところで、神の方はカナを忘れてはいなかった。カナの幸福は永く続かず、亭主は大きい借金を残して失踪してしまった。カナは亭主を探し求め、会いたい一心からカンカリヤの家に出入りするようになった、カナは延期願ひをやめて神の道に入ることに決めたが、まだしばらくはカンカリヤ生活ではなく、子育て、借金、再婚、と時間が続いていく。

カナの枕元に、色の白い大きな男が立ち現れ、沖縄方言で、「おまえの命をとろうか 狂わせようか」とせまってきた。カナは恐ろしさで親の元にかげこんだ、「私は命が惜しい きちがいにもなりたくない 神様が乗ってくる どうしよう」カナは、「ごめんなさい」とわび続けた。父親は、「神様がいらっしやった」と喜んだ

カナの高校生の頃の不思議な夢。家に蛇がしのびこみ部屋まで追っかけてくる。蛇は少年に変身し、「おまえは午(うま)生まれの人と結婚しなさい」という。「いやだ 私は 同じ 亥年(い)生まれの人と結婚する」カナがさからうと、「私が死ねといえ 死ぬ運命なのに さからうのか」「ならば 三日間 病気になる」といって消えた。

再婚してすぐに、もうどうにでもなれという気持ちで入水した。「おまえに死ぬ権利はない 私が死ねといえ いつでもお前は死ぬ 今おまえは 死にたくても 死ねないのだ」

夜中、悪い霊のマジムン(悪霊の総称 ハブのこともいう これに股をくぐらせてはいけない)が乗ったオートバオが列をなして夜空を飛んできた。あるときは巨大なカマンタ(イトマキエイ)が怪鳥のように飛んできてカナの部屋を覗く。あるときは玄関に赤い馬がいなかった。宮古では赤い馬が迎えに来るのは、死神の迎だという。

カナは精神病院へ。「頭に穴が五つも空き そこから神様が入りしている」と訴えると医者は、「本当に気が狂ったものは 自分がおかしいとは 言わない あなたは正常だ」押し問答の末しばらく入院した。

ある夜、カナは一晩中、神と話をした。生きている人の霊と死んだ人の霊が固まっている。生きている人は家で寝ていたのに、死んだ人の霊に引っ張られてやってきた、生きている人の霊は泣いている。死霊と生霊をより分け、生霊は本人の身体の中に戻してやらないといけない。

カナ 26 歳、若いカンカカリヤノ誕生。「若い神の人が生まれたそうだが・・・」幾多の人が噂を聞きつけやってきたが、カナは人に会わなかった。老婆がやってきて、カナに、「線香をあげてごらん」といった。なんと線香をあげると、テープが流れるようにカナの口から、わけのわからない言葉が、神の言葉が湧き出てきた。それ以来、門口に行列ができるぐらいに人が集まってきた。

カナには 5 歳年下の弟がいた。弟と恋人は子を宿し、二人は結婚して新所帯を持とうとしていた。そんなある日、弟は歩いていると、前方の森から彼を呼ぶ声が聞こえる。小道をかきわけ声のする方に近づくと目の前にぽっかり鍾乳洞の入り口が表れた。ビロードのような苔の上に腰を下ろすと、「裸になりなさい」と声が聞こえ、弟は服を脱いでゆっくりとそのまわりを歩き出した。「歩きなさい」という声に幾十回も歩き回り続けた。弟にはだんだん神が乗り移ってきた。「こっちへ来なさい」という声に、弟は裸のまま洞窟に入った。乳房の形の石がふたつ、線香の跡があった。突然大きな声ときらめく光が降り注ぎ弟の身体を包んだ。白い紗の衣をまとった髪の長い女、蛇の鱗のようにキラキラする肌、盛り上がった乳房が見えた。何とも言えない快感の渦が弟を巻き付け、彼は両手を垂れたままこれまで感じたことがない感情につらぬかれ、身体の一部が痛いほどに硬くなった。大胆にも彼は奥に祭ってあるご神体石の前まで進み、乳房の形をした石に向かって彼の白い液体をほとぼらさせた。それは女神を犯す行為、瀆聖(とくせい-神聖なものを冒瀆する)の快感と肉感がないまぜ、彼の感情が灼けつくように昂ぶるさまがみてとれる。

◎巫女・神子：神職を補佐する未婚の女性。神がかり状態になって、神託を告げる者。谷川先生：巫女は神のみに従属して、特定の男に従属しない。不特定、複数の男性を相手にするということから、巫女から娼婦への移行が可能になる。その変遷を媒介するのが巫娼である。巫女から巫娼へ、そして娼婦へと。

◎各先生、女の先生も含めて、巫女・巫娼・遊女という話を傾けられている。神に仕える、神と遊ぶ、神の存在を布教する、どこからか、「男と遊ぶ 遊ばせる」と変わっていったのか。

◎「遊行女婦」という言葉、「神を遊ばせ 神を求めて遊行する」巫女の特性を、「男を遊ばせる」巫娼も、遊女も姿を変えて受け継いでいると思われる。

◎「倭名抄」では「遊女」を「うかれめ」と呼んでいる。「梁塵秘抄」では、「あそびめ」と呼んでいる。

◎大和岩雄著<遊女と巫女>遊女の起源をめぐって昔から、巫女起源説がとられている。最近でも、「遊部」から「遊行女婦」「遊行巫女」へと発展したとされる。男性が俗的政治を担当するのに対し、女性は原始古代より聖なる部分を分担し祭祀を司ったとする。巫女起源説を再検討する学者は、「売春の職能は十世紀に成立、十一世紀には、遊女の職能集団が成立、女性の社会的地位低下、女性が男性に従属する歴史の成立でもあった。

山上伊豆母踏<巫女の歴史-日本宗教の母胎>

◎原始時代の心象はアニミズム（万有靈魂）などと呼ばれ、スピリット（精霊）やデーモン（魔霊）の飛び交う世界。日本の古典に、「出雲国造神賀詞（かむよごと）」で「豊葦原の水穂の国は、昼は五月蠅なす水沸き、夜は火釜（ほべ）なす光（かがや）く神あり、石ね・木立・青水沫（あおみな）も事問いて荒ぶるくになり。瑞穂の国はさながらお化けの世界。原始人はまず生存生活し、糧を得なければならなかった。採集・漁労・農耕、生命をつなぐものに呪力を感じただろう。アニミズムにおいて、未開社会は食うか食われるかの生存競争であり、命の糧に最初の霊性を見つけ呪術をかけ獲得した。

◎縄文時代：縄文遺跡、縄文土器・土偶、呪物信仰や原始呪術が見られる。

◎弥生時代：稲作、金属の渡来、日本書紀、古事記の神話、大陸から入ってきた、道教、儒教、仏教思想、それが入り混じって諸信仰習俗となっていた。

◎原始国家の成立には巫女王が大きな役割をはたしていた。後々も祭祀儀礼や宮廷芸能となって継承されていった。王権や祭政の起源を語る神話と、宮廷や諸大社で行われる諸儀礼とは表裏一体に見られる。

◎原始社会において巫女王であり、大化前後には女帝となり、律令時代には国教たる神祇制や仏教の間隙をぬって、しばしば託宣を發し朝野を驚かせた巫覡（ふげき-男女）たちの活動も、中世の秋を迎えると政権の座から凋落し芸能集団として再生する。平安末の「今様」「白拍子」「傀儡子女」らは古大社に住みつき、同じ芸能集団の「猿楽」「田楽」「琵琶法師」と能や平曲を完成した。かつて古代巫女たちの神語、「語りごと」が琵琶法師の軍記物に変化した。遊女・白拍子化した巫女たちは、公武の間をさまよい、社寺の宗教芸能に身を寄せ、歩き巫女たちは、「歌舞伎」を生む。

◎カブク（傾く）カブキといった異形風俗の流行、「カブキ踊り」の旗手として1603年「阿国」が出現した。阿国は出雲大社の女神子（みこ）、京にやってきた「歩き巫女」であり、新しいカブキ踊りと古いシャーマン性を示した。異風なる男の真似をして、刀、脇差、衣装以下殊異相、当代の耳目を驚かせた。出雲の巫女・巫娼は信仰集団なのでは。

◎熊野比丘尼・歩き巫女・勸進聖・御師・説教聖・修験者・絵解法師、いずれの宗教芸能者の遊行回国の前身は、古代の巫女の末裔である。

北海道から帰って初めて安威川の河原にやってきた。昨日は一日中雨が降っていたというのもあるが、アトリエがぐっちゃぐちゃになっている、片付けないと翌日はアトリエに何人か絵を描きに来られる。大汗を流しながら断捨離もかね働いた。阪神地震でこりているので、地震以後の当座は、紐で結べるところは結んでいたが、ものを頻繁に入れするブースは、紐を結ぶこともなく過ごしていた。さすがに紐をかけそのままのところは、ずれることはあってもバタリ倒れていない。本が、食器が、絵が、右に左に倒れている。箱に入っていたものが散乱している。今もコーヒーを入れようと気づいたが、コーヒーを入れる時の三角形の奴、なんてぼけていると、「コーヒードリッパー」という名前があるらしい、それがない、日本茶用急須がない、カップが半分以上ない、ガラスコップもなくなっている、あれれ、早速買わなければ。おいしいのが撮影用の500Wのライトが5個いかれてしまった。

19日の朝は北海道の、「虫類」というケタイな地名の道の駅の奥の駐車場、草の生えたところで飯が終わってくつろいでいた。<ちゅうるい村は、アイヌ語で、「ちゅうるいべつ-急流の意、日本初の、ナウマンゾウ全身骨格の化石が出た地。>その日も朝5時に起床、今朝で車中泊は終わりだと敷布団をたたみ、毛布・寝袋をたたみ、車の中を整理して、「ちょっと 歩くか」と丘の方に進んだ。スキー場という看板のあるところを登った。丘のてっぺんから町を見下ろし速足で帰った。丁度1時間の運動、これをしておくと身体が楽だ。ごはん味噌汁の朝食を食べ、椅子に座っていた。前にいた、三重ナンバーのハイエースのおっさん、オレの車のナンバーを見て、「大阪で 大きな地震があったみたい」という。車のNHKラジオをつけると、大阪北部、高槻・枚方・茨木あたりで、マグネチュードは低いが直下型の地震、震度が6弱だという。大阪北部では観測史上最大の数字だという、阪神の時は、茨木は5強だったかな。阪神の時は階下で寝ていた、初めて体験するすごい揺れにびっくりした。今回の揺れは居ないので何とも言えないが、アトリエのぐっちゃぐちゃ程度は同じだと思った。ただ何年か前の家の改装時に、耐震工事をした、それこそ大変な工事だったが、それ以来少々の地震でも家は揺れなくなった。今回は家自体の被害はゼロである。

ラジオで驚いたのは、「寿栄小学校」の名前が出てきた。今回の旅も月2回の寿栄講座にあわせ、終わった夜に出発し、その前日に帰るように設定している。TV報道で見る小学校の画像は知らない、というのはいつも違う門を利用しているからだ。少女が一人コンクリートの塊にうたれた。これで思い出したのが、別の小学校、運動会の片づけをして休憩していた時だった、「どん」という音がした。見に行くと、渡り廊下の出入り口庇の一部が落ちている、100Kの重さがありそうなコンクリートの塊だった。なぜ配筋していないのか、鉄筋が入っていないのか、もの造りの常識を疑った。今回は寿栄講座が休講だと連絡があったそうだ。関西には地震は来ない、危ないのは関東だ、と言いきかされ、自分もそう思っていた、阪神の時は驚いた。それ以後関西の街には防災意識が増し、家屋や建築・土木の耐震補強工事が次々目についた。今回街を歩いてもブルーシートが被っている建築物は、古い形式の建物ばかりだ。

オレは地震発生からほぼ2日経った、20日の24時に近い時間に家へ帰り着いた。帰ると下の娘が来てくれていた。階段には、「ガラス注意 二階には スリッパ着用」と書いてくれている。まずアトリエの様子を見ると、HIROKOさんがちょい片付けてくれたとかで隙間はできている。とにかく荷物を降ろす作業、全部の荷を2階に上げ、洗濯物、食い物などの始末をして、階下でビールと残り物を食った。

ガスの供給がストップしている。高槻の山手にお住まいの恭子さん、二日間水道がストップしていた、家族が、風呂に貯めていた水やらバケツの水を捨てた、と、ぼやいておられた。ミカサンは、近所のスーパー、水・パン・冷凍食品等が売り切れ状態だったという。今オレは、こうして走り、汗だらけで帰り、ヤカンふたつに湯を沸かし、風呂にあるバケツに入れ身体を洗っている、なんとかなるものだが、さすがに風呂やシャワーのありがたさを痛感。HIROKOさんは歩いて20分ぐらいの銭湯に行った。背にすごい入れ墨の楚々としたお姉さんがいる、風呂上り、ビールを分けあいしゃべるお婆さんたちがいる、アットホームな銭湯らしい。故飯橋先生も、「いい風呂だ」といっていた。

6/7~6/20、「ふらふらペインティングの旅北海道-II」を予定しています。敦賀から車ごとフェリーで出航、十二泊の旅。北海道では、車中泊の予定です。苫小牧港に着き、東の方に進んで・・・ま、あまり計画を立てず、「行ったところ 勝負の ふらふら旅」です。ネットで調べると、なんとか雌阿寒岳は登れそう、登りたい。

オレの絵も、最近は見えない、「風や」「エネルギーや」「波」といった線や面がどんどん表れてきています。今までは、「オレは 具象画家」と決めつけこだわってきましたが、いまは、「それはそれでいい 決めつけなくてもいい 離れてもいい そういうこだわりがなくてもいい 精神の開放だ」なんてわけのわからない言葉を叫んでおります。

良寛さんがどういう人だったのか、いろんな方々の本を読んだがわからない、わからないままがいいのかも思えないとも思っています。良寛さんが何処で生まれ何処で亡くなり、その間、どこで暮らし何を食べて誰と話したのか、そういうこともあらかたわかっているそうです。たくさんの詩歌、書を残しているの、何を考えていたのかも推察できます。わからないのは、なぜに乞食生活を選び続けたのか。ほとんどの人が大好きな、地位と名誉と金、それを、「そんなものはいらぬよ」言ったか言っていないのかは知らないが、彼は乞食生活を続けた。オレはとても乞食にはなれない、地位と名誉と金、オレは持ってはいないが、そりゃあ、嫌いじゃない。ただ思うのは、精神の問題、気持ちの上で、ものを造るうえで、ものを考えるうえで、「考えない こだわらない 想いを 気持ちを 捨てなければ 乞食にならなければ」というようにしようとまたなろうと思っている。

ほとんど20年前の2004年夏に40日間北海道をうろうろした。10万円でボンゴ(マツダ車)を買って出かけた。故吉谷君に、「しばらく ごいっしょは どう」と誘い、富山駅で落ち合った。吉谷は30歳代に北海道に土地を買ったが、「その土地が実在するものか 原野商法に騙されたのか それを調べたい 納得したい」というのが北海道へ行く目的で楽しみだと息巻いていた。箱型のボンゴは荷が載せられた。20号、30号のキャンバス、自転車まで積んだ。往路の船は30時間ぐらい乗ったと思うが、畳敷きの大広間でゴロゴロしながら二人で酒を飲んでいたんだろう。眠い目をこすりながら、朝のうすら寒い小樽港は印象に残っている。「まずは土地」という吉谷の言葉で、有珠山や洞爺湖のある街の市役所に向かった。途中の羊蹄山が雄々しい、いい感じの山、きれいな山と横眼で見ていた。市役所では丁寧に原簿を見せて対応してくれた。「よく来られます 調べに」その土地は存在するが、どこからどこまでがあなたのもので確定できない、その場所に入っていく道もない、もちろんその他のライフラインもない、典型的な原野商法の詐欺です、というお言葉だった。「納得した 来てよかった」といささか寂しそうな吉谷だったが、いくらで買ったのか知らない。

2004年の時は、「日本の最北端の地に立ってみたい そこで手を振ってみたい」と思っていた。2018年の今回は、雌阿寒岳に登ってみたい、それと、北海道の景色が空間がオレにどんな絵を描かせてくれるか、絵のことをおぼろげに思いながら、それこそ、「いったところしょうぶ」の旅でした。

雨の苫小牧港に夜8時に到着、鷗川の道の駅で寝た。→二風谷(にぶだに)アイヌ博物館からスズラン群生地、その駐車場に寝た。→雌阿寒岳方面に向かい、途中の足寄湖に道の駅で寝た。→晴れている、雌阿寒岳に時計回りで登り下の国民宿舎で泊まった。→そばのオンネトーキャンプ場で絵を描きだしたが本格的に降り出し、そこで寝た。→海へと進んだ。尾岱沼(おだいとう)のキャンプ場で寝た。→尾岱沼で絵を描き、昼過ぎから雌阿寒湖に戻って寝た。→2回目の雌阿寒岳、しばれる、氷が木や岩に着いていた。キャンプ場で寝た。→オンネトーに居続け、キャンプ場で寝た。→船に向かって進み、虫類の道の駅で寝た。船の中を含め12泊の旅でした。同道の衣川さん、「一緒に行こう 北海道 船賃任せて」とお世話になった。

7日:いよいよ出発。緊張した面持ちで車のアクセルを踏んだ。「あれえ ダウンの上着が」家を出るときに持ったはずだがと戻った。なんと車の後ろに乗っていた。ダウンは必需品だった、ずっとに着ていた。近畿は梅雨入り宣言をしたとか、晴れていたが午後から曇ってきた、北海道も着いた日も翌日も雨模様らしい。

今日は忙しかった。朝から自転車で 20 分の高槻寿栄小学校へ、午後は我が家のアトリエで一日中の教室だ。高槻はもう通い始めて十年は超えただろうか、男・堀井さん 1 人と 20 人以上の女性が笑顔で待っている。オレの教室はやかましい、ワイワイガヤガヤ皆さん大いに語っている。「タメグチで すみません」笑う。タメグチという言葉を知らなかった。聞くと、友達言葉、友人たちとおしゃべりする言葉だそう。聞くとよそでは、「そもそも静か 話なんて」「先生のいう通りにしないと 怒られる」「先生の指示通り お手本通り」だそうである。高槻が終わり、スーパーで船内用のパンとビールを仕入れた。昼飯が終わるとすぐにアトリエの方々がやってきた。「今日は申し訳ない 5 時か 5 時半に帰ってください」と前回にお願いしていたので、皆さん時間がちょい短いぶん大張り切り。二人の方が六月下旬に天王寺美術館への出品がある。この出品は全関西美術という展覧会、多少レベルが高いとか、とにかく、「通ってくれ」と祈るしかない。

今日は暑かった、28 度だという、夏じゃないか、急ぎシャワーを浴び、コロッケ一個とキャベツ、豆腐をかきこんだ。一路敦賀港へ、これを録音しながら、車からは、MJQ モダンジャズカルテットの軽妙な音楽が流れている、もう古臭い調べなのかもしれないが、いいねえ。

パソコンで検索すると、高速道路を利用しなくても 3 時間強で敦賀港まで行ける、6 時に出発すれば 9 時過ぎには着く、出航の 11 時半には早すぎると思ひながら車を走らせた。朝から忙しかったので眠いと思ひながら走らせた。まず、171 号線大山崎 IC に入り、京都東 IC で出た。730 円也。安曇川の道の駅向いのスーパーで休憩、9:30 にはフェリー乗り場付近まで来てしまった。「ちょっと早い」敦賀の街を散策とはいえ真っ暗の中、土地勘もないので右も左もわからない。でっかい体育館のような建物のそばの駐車場に車を止め歩き出した。今日は走りも歩きもゼロ、身体がだるい、ピッチを上げて歩いた。迷ってはまずい、こういう場合は直線に限る、曲がっても一度か二度、とぼやきながら左に曲がって太い道を進んだ。ひょっとしたらここは敦賀市のメイン道路かな、立派な道路に立派な歩道。敦賀という町は、今でこそ茨木に比べ人口は少ないかもしれないが、百年前までは日本海側の大きな港街、物流に軍隊にと栄えた感がある。切妻の昔懐かしい倉庫群も堂々としたものである。茨木がまだまだ田圃だらけ、人口も 1 万人ぐらいのころに、敦賀は、でっかい船が出入りして人がモノが金が溢れかえり沸き立っていた街の姿がそこに残っている。

10:30 港に着くと赤い信号灯を持ったガードマン、「乗船」「イエス」「乗船は 11 時ぐらいから こっち」と誘導され列に並んだ。でっかい船だ、何本ものスロープがありトラックが出入りしている。先ほどから敦賀港に近づくと、頭だけのトレーラーがいくつも目に付く。「なんだろう」と不思議に思っていたが、船に出入りの大型トレーラー、入るときはよく見かける一体姿だけれど、スロープを下ってくる時は頭だけになっている、「あそうか トレーラーは 頭と胴体は 別物なんだ 一体のものとばかり思っていたが どの頭にもどの胴体にも互換性があるんだ」フェリーでは出航すると車には行けないという、今まで何度かフェリー体験はあるが車に行けないのは初めてだ。あわて歯ブラシを取りに車まで下りて行った。「さ 一杯飲もう」と持参の酒とチーズ、真っ暗な外に漁火が見える、明るい、まさにギンギラギンの明るさである。「もうちょい」とコップに酒を入れた、もう酩酊気味である。真っ暗な空に月だ出ている。今日の月は左下が円弧をかき、5、6 日ぐらいの月、なんていう言葉で表現するのかね。敦賀に来た時、星がきれいと言った。船の中、窓の外に見える月、向こうのほうの街の明かり、下のほうに波の影、室内がもっと暗ければ幻想的だろう、オレも酩酊、寝るとしよう

8日：船のベッド、目覚めると朝の10時、昨夜は2時か3時までだらだら飲んでいて、よく寝た、快適である。同道の衣川さんとは昨夜船の中で会った。オレが先に、部屋に荷を置きホールに立っていると乗り込んできた。「えええ まさか」と驚いている。彼は昨夜9時過ぎ列に並び、「岡村さん 来ない 渋滞で遅れたのか 一人旅になるのかな 電話して 追いかけてと 連絡しなければ」とやきもきしていたそうだ、もう来ないと思ったそうだ。オレの車はふたつ隣の列に居たのにね。

今回の北海道の旅の誘いを受けた時に、それじゃ、「ふらふらペインティングの旅北海道・II」ということで二十年前と同じように車中泊、絵の道具を積み込み、なるべく人のいない所をふらふら思いつくままに絵を描き、気ままに動こうと決めた。キャンバスは何枚にしよう、大きさはどうしようと、十号程度の布を10枚、同じ大きさの紙を10枚、アクリル絵の具に水彩絵の具、それらを張る合板を3枚積み込んだ。前回に比べ車が小さい、今の車はエンジンは大きいワゴンなので、前回のボンゴ、箱型とは容量が違う。後部座席を前に倒し、アトリエで使用している薄い敷布団を敷き、綿のシラフ、分厚い毛布を積み込んだ。いつものコンロと6本のボンベ、山用コフェル、調理用具、水2Lボトルを10本積み込んだ。ボイルして食べるごはん、みそ汁やラーメン、玉子にミニフライパン、コーヒー、茶と積み込んだ。前にも持って行った自転車はさすがに積み込めなかった。着替えの下着、温か下着、忘れていけないのが山用グッズ、30Lのザックに登山靴と、雨具を積み込んだ。あれば便利かなと思って積んだゴム長靴は便利だった、北海道にいた間ほとんどこれを履いて過ごした。

船の後部甲板に出た。天気はぼんやりした晴れ、屋根の影が甲板デッキにこれもぼんやり写っている。北海道は明日・明後日は雨だという。この船は大きな船だ、後部の甲板にはHマーク、へりが止まれるようになっている、日本海には全く船の影もない、太平洋は陸地から海を見ているとたくさんの船が行き来しているが、日本海、一度大海原に出ると、海はまさに大海原なのかもしれない。11時現在で秋田沖だとアナウンスがあった。進行方向左側が北朝鮮、中国、ロシアで、右側が日本だがどんよりしているのか島影ひとつ見えない。この船の復路船が行き違えます、というアナウンス、行き違うフェリーが汽笛をぼっと鳴らす。

ヨサコイソーラン祭りが札幌であるらしい。京都の学生たち、男女百人ぐらいが乗っている、二十歳前後の若者たちのエネルギーが眩しい、カップラーメンをすする男も女も旨そうに食っている。

朝食は昨日、「船の中でどうぞ」と中島さんがくれたパンを食べた。ベッドにあるコンセントにつなぎ、パソコンで文字を打った。復路で知ったが、船には、PCルームがあり、机にコンセントが用意されている、知らないもので狭いベッドで2時間ぐらい作業をしたかな。1時に食堂で1000円の豚丼、旨いが船の食堂は大阪の街のようになんでも旨く安いではない。「スポーツルームがあったのでは ちょい汗を」歩行器がある、1時間歩いた。ランニングマシン、20年前は時速10Kで1時間、手を放して平気で走っていたが、なんと最近は何も握って6.5K、おっちらおっちら、しかもバーから手が離せない、離すと、おとととである。1時間頑張ると大汗、洗濯の都合で着替えるのはよそうと思っていたが、風呂に入って着替えた。北海道では日々洗濯もできないので、着替えが足りないかなと思っていたが、結果では10泊で2度温泉に入っただけだった。

いよいよ北海道が見えてきた、先ほどから津軽海峡に入ったという、北海道の山々が見え、雨が降り出し、多少うねりが出ているのか、大きな船もふらり揺れる。ベットで寝そべったり、ソファに腰掛け外を見たり、ゆっくりと夕方になっていく。船内の晩飯は、アジフライがある、飯とみそ汁、「500円です」「やすい 旨い」オレはカレーやラーメンより小さいおかずとごはんがいいね。24時間の船内生活、食いもん飲みもんがもつという、温かいジャケットがいる、運動用の服があると学習した、復路は準備するぞ。風呂も入った。

9日：雨のアウトドアは嫌だね、昨夜は港に着いた時点で雨、けっこうな振りかた、天気予報どおりだ。まずは最寄りの道の駅：鶴川へと走った。船から降りる前に山スタイルに着替えた。長靴、大阪で着用していた上下の冬用下着、山用ズボン、ダウンのジャンパー、それにバンダナ、このスタイルで11日間過ごした。道の駅で夜の雨の中、車の荷を前の座席に移し片付け寝床を作った。ここはホテルや風呂も営業しているので、雨のあたらないところでビールを飲んで・・・と、てんやわんやの、車中泊。

朝、見わたすとたくさんの車が車中泊をしている。さすが北海道と思うとともに、せめてトイレ代の500円足らず払ってもいいねと思う。買いおいたパン、オレ製手造りパンを齧りながら車を走らせた。オレ製手造りパン：これは初めて紹介するが、実は一カ月ぐらい前にパン焼き機を購入した。「じゃまくさいよ」「どうせすぐに使わなくなるよ ほこりがかぶるよ」とみなさまから揶揄されたが買った。初めの2.3回は、「これなら スーパーのパンの方が いいのでは・・・」と思ったが、4回5回と回を重ねるうちにその味のとりこになり、いまやオレ製手造りパンは欠かせない、毎日のように造って食っている。ただ防腐剤が入っていないので、持ってきたものに、このあたりでカビが出だした、船の車の場所が、温かかったのかも。

衣川さんが二風谷（にぶだに）に行きたいという。アイヌの人たちが色濃い地域だそうで、まずはそこに出向いた。北海道初日の朝の道、車を走らせながら、「おお 雪の時の 道路マーク 富山にもあるが 北海道だねここは」とまずは感激。次に、建物の屋根の形、ちょっと古い建物の屋根の形が普通の切妻ではなく、ダブル切妻というのか、六角形というのか、勾配が二段になっている。雪のせい、デザインのせい、北海道独特の屋根の形、この形を見てまずは感激。繁華なところをちょっと離れると、広々とした草原、「ああ これは北海道の景色」それとロール牧草、黒い包み、白い包み、これも北海道だね、うれしいね。二風谷に資料館がいくつかあるがまだ時間が早い、わらの屋根と壁の建物がいくつも建っている、これらの家がいつの時代までだったのか、最近までアイヌの人がこんな粗末な家に住んでいたのかな・・・？オレが幼少のころ、大阪の極貧地帯でも家は板かトタンだ。ガラス窓はあるが、わらだけの家はさぞかし寒かろう、しかも小さい、ものおき小屋の雰囲気だ。二風谷は明治のころアイヌ人が500戸、そののち倭人がやってきて、小学校ができ・・・と町の説明。

キタキツネがいた。栃の白い花を見た。鳩ぐらいの大きさのベージュ色のキツツキが木の幹に止まってつついている、じっと見ていたら逃げられてしまった。あとで知ったが、「ヤマゲラ」だそうだ。

車の走るスピードがすごい、オレは速度違反が怖いので標識より10Kオーバーぐらいで走っていると、皆さんひよひよい追いぬかしていく、赤なのに横から車が出てくる、これも北海道なのかね。

ここまでの道々、サラブレッドの産地だという、牧場には4、5匹の格好にいい馬がいた。

資料館には自然コーナーがあり、その動物たちの剥製、みなでかい、ふくろうは中型犬ぐらい、狸も小型の猪風、キツツキもでかい、「そらあ クマも デカくて 怖いわけだ」地衣類もなんだかきれい、生き生き白く青くみどりがかっている。

スズランの群生地、「どこにスズランがあるの」笑ってしまうが、よく茂った草むらの下にひそやかに咲いている、「なんだ これは つまらんね 信州 高遠のスズランはよかった」「よし ここで絵を描こう」くさっぱらに絵の具を出しキャンバスを広げた。色を一色、次の色、なんだかおもしろくないね、よくないね、落ち着け、気持ちをカラにしろ・・・半日うなった。なんとまた小雨が降り出し、慌て片付けた。

1時間ほど速足、雨がやんだ。ええい飯だ、ビールとウイスキーを飲んでいるとキツネが来た、人慣れしているのか餌をねだる。北海道は暗くなるのが遅いのか、夏至までまだ十日以上あるのになかなか暗闇になってこない、不思議だ。それでも9時になると満天の星空、さすがにすごい星、愉快なぐらいの星空である。

10日：朝、淋しい駐車場で目覚めた。7時のサイレンが鳴っている、なんだか黒い雲、いささか寒い、大阪で夏に近い高温に慣れてしまっている。今の気温、大阪では冬、温かい冬の日、ダウンは離せない、持ってきて正解である車内で11度だ。もっとも北海道の人に聞くと、「いやあ 先日まで 北海道も暑かった 日本で一番あつかったんだよ」そういえばニュースで言っていたな。

砂利道の林道を奥へ行って見た、ひとがいないところに来ている、なんだかぞくぞくするほどにいい感じの風景だ。「ちょい描くぞ」とスケッチブックを出し、何枚も落書をした。昨日の中途半端な絵、この感覚で完成させなければ。横に川が流れている、小高い丘、牛がいるのか馬がいるのか、草が生えている。川の流れの絵を描いている、「地球の形」という絵をよく描いていたのを思い出す、なんだからうれしい題材、いくつか落書スケッチをした。地球の形というのは、山があり、川があり、島があり、そんな景色を地図でも描くように空からその形をいただく、決して遠近法とか、ここからはこんな見え方はしないよとか、つまらない常識人になってはいけませんぞ、オレの目は、オレの身体を飛び越え、空からも眺められるのだ、ただしその時は、オレ自身は、見えないがね。「そらあ オレ自身を 眺められたら オレは もっとすごいことになっていられるのだが・・・」

衣川さんが、「阿寒湖の方に 行きましょう」という。「・・・を通過して つぎが・・・そのつぎが・・・」彼はよく調べている、道順も時間も調べている。「旅は 行く前の 計画が楽しい」とHIROさんが言う、「そうかな おれは いったとこ勝負 ぱっぱらぱ だ」と大笑い。なにもなくていい、オレの琴線が響くなら、どんなところでもいい。日高のあたりを通過して、阿寒湖に向かっている。念願の雌阿寒岳が近づいてくる。

樹海ロードを走っている、前方に背が高い山、雪をかぶっている、なんという山かな。帯広に入り、峠を越えるこのあたりの山々、「きれいねえ まさに樹海」どこかで車を止めてゆっくり景色を見たいと思いつつ、トンネルを超えたら、曇っている、「トンネルの前に 止まるべきだった あとのまつり あとのトンネルだ」

足寄湖の道の駅で寝ようと決めた。ちょっと散歩、なんとフクロウを見た、すごい、こっちを見ている、やっとお目にかかれた、「ちょっと写真」と構えたら、パタパタ飛んで行ってしまったが、その大きさ、中型犬ぐらいかな、よくあの大きさ、飛べるねえ。

夜が終わろうとしている、焼きそばにラーメンを食った。明日明後日は雨模様だという、雨のアウトドアは嫌だねえ、それもいたしかたないか。

ウイスキーを飲みながら腰かけていると、マウンテンバイクの前後左右に荷をくくりつけた自転車兄ちゃんがやってきた。30歳代の彼がまずやってきて、「おお 自転車で 泊り旅か」と感心していると、続いてママチャリの女性、なんとペア～、船でやってきて自転車で回っているという。彼は京都の人、彼女は神奈川の人、あのママチャリでよくまあ坂を上り下りしてと、笑っちゃうけどすごい。「朝 雌阿寒岳に登って ここまで来た」とは驚き、車で国道を走るだけでも2時間近くかかるのに・・・。目玉焼きを贈呈、彼らはトイレ裏でテント泊をしていた。でっかい蛾を発見、北海道の生き物たちは、本当にでっかいね。

北海道にはアイヌ人が多い。ふっと出会って、「だれがアイヌで だれが倭人」とはわからない。「この人は アイヌだな」と衣装やひげでわかる人もいるが、その彼はわかるように演出している。北海道には明治前後にたくさん倭人が入ってきてまだ時が経っていない。武力や経済力の違いが大きく区別や差別が残ったと思う。東北や関東にも、アイヌ人はたくさん居たが、ほとんどが混ざってしまい混血を繰り返して、日本人になっていると思う。アイヌの文化はすごいが、ことさらアイヌ人だと、区別も誇張もいらない。いいもの、いい文化、いい習慣は、残せばいい、悪いものはアイヌ人も倭人も覚えておけばいい。混ざればいい。

11日：6時に目覚めた、空を見ると曇天、かすかに降っている、明日と明後日は雨だそうだ。241号線を雌阿寒岳に向かって走し、「いやだねえ 本降りだ」このあたりの農家は昨日の日高地方の巨大牧畜、広大農地に比べやや小ぶり、「牛乳・はちみつ」と書かれたのぼりがハタハタ、これは親近感がわくね、巨大すぎるのは工場のような。このあたりの風景はなんだか懐かしい、しかし肌寒い、大阪での冬の服装である。

◎9：30 登山開始。道中雨が降っていたが、雌阿寒岳に近づくころにつれ陽が、雌阿寒岳のてっぺん、黄色い部分がチラリ、「これなら登れるかな」見あげると霧がかかったり霞んだり、風もある、「よし 登ろう」で用意を始めた。登山靴、雨具の上下、防寒具、昼飯にご飯とカレー、いくつかのパン、2Lの水も持った。昨日衣川さんが、「雨模様だから 雌阿寒岳の宿を ふたり分 予約するよ」ということで山を降りたら温泉宿が待っている。  
◎このあたり、「アカエゾマツ」の群生地だそうだ。まっすぐ高く伸びるアカエゾマツ、初めて見る木だ。凛として力強い、木肌は松だが姿は見慣れた松とは違う、そいつがぐんとぶっとく上に伸び、その横で広葉樹、ひよろひよろ背を競いあい陽を求めてこれまた上に伸びているのは何の木だろう。

◎いつものようにケタイ君を探して下を見ている、彼らは北海道でも同じかな、右に谷のある尾根筋だが緑の苔が雨の後で瑞々しい。ケタイ君の頭に赤い玉、おしゃれじゃないですか。歩きながら下を見てきょろきょろ立ち止まる、カメラを出す、このスタイルはゆっくりできていい。前は道草もせずにただひたすら登っていたが・・・

◎10：30 このあたりから高木がなくなって、ハイ松帯、背丈の2.3倍の高さで茂っている。渡渉とはいえ水はない、そこを超えてぐいぐい登っていく、今までの森林地帯から岩の山に変わっていく、ゴロゴロ、巨大な塊、小さい塊、硫黄のにおいがしてくる。見上げると霧の流れる間から、山の形が見えてくる、黄色い火山の山だ。

◎看板に、河口から1K圏内に入りました、もし、黒い煙、異変を感じたら、直ちに下山してください。ザックなどを頭に当て火山弾などを避けてください。噴火が起こったら急いで降りるけれど、こればかりは。最近ニュースになる噴火は突然やってくるものが多い、雪崩と同じで、そこにその時に居なければいいのだが・・・

◎ゴロゴロ石、色がついている、それこそ地衣類がついているのか、もともと噴火時からこんな色なのか、赤、黄、黒、絵の具をなすりつけたように、ほのかに色が感じられる、荒々しい火山の山肌だ。

◎11：30 もう少しで頂上か、ゴロゴロ岩の間に地を這うようにハイ松が茂っている、その緑、針葉樹の松なので新緑の季節はないのかもしれないが、それでも樹々も春を感じ、葉っぱが黒っぽい緑の中にも青やら黄やらの絵の具をちょっと混ぜた華やかな色を感じさせる。この旅で雌阿寒岳に登れるとはうれしいねえ。単独の人が二人、5.6人のパーティが3組に出会った。パーティの一つは気象庁の人たち、火山点検かな。

◎九合目というところにやって来た、風がきつい霧で見えない、右側の火口が全く見えない、切り立っている崖が見えるだけ、底があるのか、池があるとネットで見たが、火口は円く囲まれているのか、残念ながらまったく見えない。シャツ2枚で登ってきたが、寒い冬用ヤッケを出して着こみ、そのポケットに入っている手袋をはめ、フードをかぶった。大阪を出る時、毛糸の帽子を迷ったが、置いてきたのは残念。早々に時計回りに降り始めた。

◎1：00 七合目まで下りてきた、下にオンネトー湖が、左に阿寒富士が見える。阿寒富士もなかなか立派な山、体力があればたった2時間、富士にも登り返したい。こんなでかい三角錐が一回の噴火でできたとは、そのエネルギーはすごいものだと感心。ドッカ〜ン、一二年は異常気象が続いたか、いまだに木も生えない黒い石の山だ。斜面にでっかい岩がひっかかっている、あれが飛んだのか転がったのか、ものすごい姿、怖いね。

◎3：30 オントネー湖の駐車場まで下りてきた。キャンプ場がある。車中泊の方でも350円払えば水もトイレも敷地も東屋も使えると書いてある、ここはいい、ここは今回の旅で最後までお気に入りの場所になった。アウトドア生活で思うことは、車中泊でもテント泊でも、ワンコインぐらいの金を払って、敷地を水をトイレを設備をえるのは便利だ、そういうシステムになればいいねえ。北海道はごみが捨てられないですぞ。

◎アカエゾマツの原生林の貴重な地帯、寿命は150~200年、高さ40M 直径1.5M、普通の松の幹に赤色絵の具をほんの少し練り込んだような渋い赤なり紫なりが感じさせられる木肌の色、いい男ぶりの精悍な木だ。

12日昨夜は阿寒温泉、野中旅館にお世話になった。「ああ疲れた」とまずは風呂に向かった。なんだか古めかしい、木製引き戸を開けたら、いかにも昔の湯治温泉という感じ、床も壁も板張り、風呂桶も10人は入れる大きさの木製、すべてが木造の昔ながらの造りだ、これはすごいとうれしくなった。風呂ギライではないが、この歳になっても、いくら高級温泉でも長い時間湯に浸かるとか、何度も入りなおすとかの習慣はない。思い出すねえ、燕岳に登る前に麓の中房温泉に泊まった時。ここも湯治の湯らしいが、湯治の話はさておき、入った風呂に同じ年ぐらいの女性が3人浸かっていたのには驚きうれしかったね、こういうことはそれ以後二度となかったねえ。上高地の釜トンネル入り口にあるト伝の湯も入った。階段で地下に潜っていった先に湯舟があった。ま、これは話のネタだね。阿寒温泉は車で近づくと硫黄に臭いがプンプン、風呂も窓を開けたままにしないとガス中毒になるので開けっ放しである。ケロリン?と書かれた黄色いプラスチック製の桶だけは昭和の臭い、あとのすべてが昔話の世界。石鹸もない、蛇口もない、板張りの床と、板張りの壁、むき出しの梁、大きな木製湯舟、近代設備はない。開け放たれて外には石で組んだ露天風呂もある。女湯との境もすだれだけ、「ひょっとしたら透けて見えるのでは」という感じだが、どなたも居なかった。「手持ちの石鹸を どうぞ 使ってください 泡は 出にくいですよ」三日間の垢を落とし、洗濯機と乾燥機を借りていくつかを洗濯。今回の旅で洗濯はこれ一回だったが、寒いのと、風呂に入らなかったのとで、着替えは減らず持っていたいくつかで十分に過ごせた。食事は部屋に運んでくれ、ビールで乾杯、そのあとウイスキーを飲んだ。食事は、山菜料理を中心にサーモンと肉がある。

昨日は、雌阿寒岳を時計回りに登った。オンネトー湖からの宿への帰り道、30分ぐらいのところで、ストックを忘れた、朝、「ええい ストックを探しに行くぞ」と歩き出した。オンネトーの散策路、自然の樹林が素晴らしいという森、もう一度歩くのも楽しい。クマが怖いので、チリンチリンだけは鳴らしている、シマリスも見た。「探し物はなんですか・・・」下手な歌をうたいながら30分ぐらい歩くとストックが転がっていた。「ええい あきらめよう」と思いながらも探しに出かけ見つけた時の瞬間はうれしい限り。オレにはこの十年で探し物を求めさまよう話がいくつもあったと思い出す。見つかって手にして感激したものには、最近の画廊の鍵、山でのピッケルのゴム、手袋片方、出てこなかったものもたくさんあろうが、出てこなかったものは不思議と思いつけない。昨日のストックも古びて汚いもの、買えば安いものだけれど長年使いなれた道具なので再会はうれしい。

10時。オンネトー野営場に来た。ひとつこひとりいない。ここは町営で、「車中泊の方も 350円を払って ご自由にお使いください 管理人は 夕方の4時から7時まで おります」と書いてある。あずま屋がある、その下に絵の道具とガスコンロを運び入れ、キャンバスを床に広げ描き始めた。スズランの場所での思い出を描き始めた。地球の形、向こうの山のうねり、牧草の緑、どんどん描けた。雨がきつくなりだした。ご飯とみそ汁で雑炊をつくった、最近のご飯が多い、パン好きのオレには珍しいが、パンよりごはんのほうが腹持ちはいい、でもやはりオレはパンが好きだ。アトリエに転がっていた簡単コーヒーマシンをいれた、お茶も入れた。あずま屋の下、キャンバスを広げて描いているが、べったり水を使った水彩絵の具はなかなか乾かない。厚塗りのアクリル絵の具はちょっとだけ乾きつつある、乾かないと次の色が次の筆が入れられない。昨日の雌阿寒岳下山時に会った気象庁の腕章をつけた方々が、同じ宿に泊まっていた。「おそれいります 旅行者ですが 天気は・・・」「間もなく降るでしょう 今日はずっと 一日中 降るでしょう 明日は ううむむ・・・」「ありがとう」気象庁氏の言葉通りどんどんきつく、風も吹き、あずま屋の床も徐々に濡れてきた。横降りの雨が入りだしたので、3枚の絵、天井の梁に避難させた。「ま ゆっくりいこう 明日は晴れるだろう」という期待は後々甘まかったが・・・。

4時ころ事務所に明かりがついたので、「車中泊ですが」「どうぞ ここに名前を」住所氏名を書き支払った。「寒いでしょう」とストーブの前からおっしゃる。この寒さは季節外れの寒さらしい、北海道の人でも「しばれる」という寒さらしい。7時ころに管理人が去ってしまうとまったくのひとり、雨の中、屋根のある管理人棟の廊下を動物園の動物たちのように右へ左へと行進して体を温めた、もちろんアルコールでも温めた。